

ドイツ批判心理学における活動理論と行為理論の論争

A Controversy of Activity Theory and Action Theory in Germany Critical Psychology

百合草 禎 二

YURIKUSA Teiji

常葉大学名誉教授

本論文の目的は、ドイツ批判心理学内で起こった活動理論派と行為理論派の論争から、心理学研究における活動理論の意義を明らかにすることである。

また旧ソビエト心理学の遺産である活動理論と批判心理学における活動の理解の相違の検討を通して、「主観的なものとしての心」への社会的アプローチのあり方を明らかにすることである。

本来、活動理論は、心と社会との分断を克服しようと構築されたアプローチである。一方、ドイツ批判心理学は、当時の社会科学を席捲した批判理論の触発と同時に、ソビエト心理学の影響を受けながら、カテゴリー的・方法論的に批判の観点に立って、主体科学としての批判心理学 (Kritische Psychologie als Subjektwissenschaft) として出発した。

活動理論とは、旧ソビエト心理学の方法論的基礎概念として、バーソフ (Басов)、ルビンシュテイン (Рубинштейн)、ア・エヌ・レオンチェフ (Леонтьев) らによって提起された 30 年代に訪れた心理学の方法論的危機の克服するための基礎概念であった。活動理論の構築にあって最も功績のあったのは、ルビンシュテイン⁽¹⁾の「カール・マルクスの諸労作における心理学の諸問題」(1934)であろう。またレオンチェフ⁽²⁾も「方法論ノート」(1938-1942)の中で諸々の基本的概念を詳細に考察した、さらに「心理生活の基本的な諸過程」(1940)の中で活動理論を定式化している⁽³⁾。もちろん両者の間では、見解の相違があるが、唯一共通に承認されている命題は、「心理は、活動の中で生まれ、発展する」という命題である。この命題に基づいて、活動概念の導入によって、当時、心理学界にあった方法論的危機の克服の道を開いた。今日、ロシアの文献において活動理論という場合は、ア・エヌ・レオンチェフの「対象的活動 (Предметная Деятельность; Die genständliche Tätigkeit)」論を指している。

一方、ドイツ批判心理学とは、旧西ドイツに所在する自由ベルリン大学 (FUB) 心理学研究所の故クラウス・ホルツカンプ (Klaus Holzkamp) 率いる“マルクス主義に基礎づけられた心理学”研究グループである。ドイツ批判心理学がどのように心理学界に台頭した経緯について言及した論文は、幾つかある。その代表の一つは、何よりも、批判心理学の主唱者であるクラウス・ホルツカンプ自らが編集した論文集『批判心理学、準備労作』(1972)⁽⁴⁾。所収の「心理学研究の社会的重要性と科学的認識内容との間の関係」が詳しい。その以外には、現在の中核的な指導者であるモーグス・マルカート (Morus Markard 2000, 2009)⁽⁵⁾⁽⁶⁾ やアメリカでの批判心理学の普及に努力しているチャールス・W・トールマ

ン Charles W.Tolman と批判心理学グループの代表の一人であるボルフガング・マイヤーズ (Wolfgang Maiers) との共著 (1991)⁽⁷⁾ や『理論と心理学』雑誌における特集 (2009)⁽⁸⁾ がある。これらを参考にまとめれば以下のようなになる。

ドイツ批判心理学の誕生の大きなきっかけの一つとして挙げられるのは、60年代後半から70年代にかけての学生運動である。国際的に盛り上がったベトナム反戦運動の高まりによる政治批判をきっかけとしての社会における学問のあり方への批判が、大きな要因の一つである。それを象徴する時代的出来事は、60年代後半から全世界的に高まってきた<マルクス・ルネサンス>運動と呼ばれている原点への回帰運動であろう。つまり<マルクス・ルネサンス>運動というのは、60年代の後半に世界的規模で勃発した学生運動の影響によって若手の研究者や学生らを中心にマルクス主義の諸文献に新たに目をむけるとともに、ラディカルに学問の在り方を問うことによって、社会科学視点にたった国民のための科学 Science for People を創造しようとする運動を一般的に指している。

さて、批判心理学は、その誕生の当初から旧ソビエト心理学の研究の歴史的遺産を批判的に摂取することに努めていた。とくに旧ソビエト心理学の三大学派の一つである文化=歴史学派のレオンチェフの影響を強く受けている。それ故、文化=歴史学派の基本的カテゴリーであり、またソビエト心理学の方法論的原理の一つとなっている<活動理論>に無関心ではなかった。しかしその最初から積極的に<活動理論>を基礎にしていたかという点必ずしもそうではなかった。

すでに述べたように、批判心理学が誕生したのは60年代後半から70年代初頭である。批判心理学がその影響力を、本拠地である西ドイツ自由ベルリン大学の心理学研究所から外部に及ぼし始め、各地に研究グループを結成し出すのは、恐らく1974年頃からである。その頃までの研究諸成果は、心理学研究所から幾つかの<批判心理学テキスト>シリーズとして出版された。それらの著書の底流に流れているアプローチは、いわゆる<歴史的-機能的アプローチ>であり、必ずしも活動概念が基本的概念としての地位を獲得していなかった。批判心理学グループが、いわゆる<対象的活動> (Gegenständliche Tätigkeit) を基本概念としなかったには、それなりの理由があった。彼らは、当初から、生活活動 (Lebenstätigkeit-K.Holzamp) や行為能力 (Handlungsfähigkeit-Ute H.-Osterkamp) という概念、さらには、近年では、日常の行為遂行 (Alltäglichen Lebensführung-K.Holzamp) という概念を好んで使っていた。

さて、それが一つのテーマとして討論の対象となりだしたのは、1977年に開催された第一回国際批判心理学会⁽⁹⁾であったであろう。この学会では二つのシンポジウムが組織された。それは「行動、相互作用、活動-社会科学における活動概念の意義について」と「行為理論の批判-心理学的基礎」であり、対象的活動 (Gegenständliche Tätigkeit) という概念が前面に登場しだした。しかしこのシンポジウムは極めて活動理論にたいしてプリミティブであった。というのは「<批判心理学>の中心的概念は、<対象的活動>の概念である」(Ulrich Garling)⁽¹⁰⁾ という規定はあるにしても、様々な活動理論・行為理論 (東ドイツの W.Hacker の労働活動論、ポーランドのワルシャワ学派の活動制御理論、ソビエト心理学の行為の多段階形成理論、行為調整の実験的研究) が並列的に討論の俎上に上げられていたからである。しかしシンポジウム「行為理論の批判-心理学的基礎」を組織した Michael Stadler⁽¹¹⁾ の問題提起は、後の論争のきっかけとなった。

論争の発端は、Stadler⁽¹²⁾が、その二年後1979年に開催された第二回国際批判心理学会の「行為構造討論」というシンポジウムでの報告である。それは第一回国際批判心理学会での問題意識をさらに先鋭化したものであった。このシンポジウムの主な参加者は、Michael Stadler、Winfried Hacker、Walter Volpertらの行為構造理論グループとFrigga Haug、Rolf Nemitzらの批判心理学グループである。論争は、主に、StadlerとHaugとの間で展開された。

論争の経過は次のように展開している。Stadlerが学会で「活動理論、批判心理学そして行為理論：概観」を報告し、HaugとNemitzが、この報告に反論する形でコメントを述べた。その一年後にHaug、NemitzとThomas Waldhubelが「行為構造理論の批判」と題して全面的に行為理論を批判した。さらに一年後、StadlerとHeinz OffeがHaug、NemitzとWaldhubelの論文に答えるという形で「行為理論の矛盾」を発表する。それは非難の応酬であった。その対決は、ドイツ連邦共和国において誕生した唯物論的心理学の分裂が生じ始めたかのような印象を与えたといわれている⁽¹³⁾。

ここで論争の火付け役となったStadlerの見解から見ることにしよう。Stadlerは、第二回国際批判心理学会で批判心理学と行為理論との類似性と差異性について活動理論を媒介として明らかにした。その目的は、それらが唯物論的心理学の二つの側面であるかどうかを検討する為であった。彼は、まず始めに、批判心理学と行為理論がその共通の理論的源泉をマルクス主義理論と社会主義諸国の心理学者の研究においていることを疑わないとしながらも、今日、かなり異なった方向へと発展し、相互交流も少なく、それらの共通の根を知ることは容易でなくなったとしている。

批判心理学と行為理論の共通性は、三つの水準において認められる。第一に、社会政治的な基本志向であり、労働組合を志向している。第二に、史的・弁証法的唯物論にその哲学上の基本志向をおいている。第三に、ソビエト哲学・心理学において発展された活動理論を志向している。しかしとくに三つ目の活動理論への志向は、マクロにみれば共通であるけれども、厳密にみれば問題をはらんでいるという。

Stadlerは、両者のこの差異によって今日の批判心理学と行為理論との対立の原因があると予想している。例えば、第一に、研究単位という点からソビエト心理学にある対立、つまりРубинштейнの観点では、意識によってコントロールされた行為（Действие、Action）が人間的な活動の基本単位であるとともに、心理学的分析の実際の基礎であるが、それに対してЛеонтьевにとっては、逆に、その分析にあたって行為からでなく、活動（Деятельность、Activity）から出発するべきだとしている。つまり研究の分析単位として、行為か活動かということである。さらに意識と活動との統一の原理と決定論の原理に差異が見られるという。

次に、Stadlerは批判心理学と行為理論との理論的・哲学的基礎の共通性を認めた上で、五つの点から差異を指摘した。

第一の点は、〈分析水準〉である。活動理論にあつて研究の分析水準は三つある。それは、活動、行為、操作（Операция）である。レオンチエフの意味で規定するならば、活動は動機によって、行為は目的によって、そして操作は行為遂行の条件によって区分されている。しかしРубинштейнにあつては、分析水準というよりは、種類として分けられているとみることができる。それ故、Леонтьевのように、動機と目的と条件とによる区分する必要性を認めない。そこから次のように差異が明らかにされる。批判心理学は、心理的なものをその一般的社会的-歴史的連関において分析するために、Леонтьевの活

動理論の意味で活動から出発する。活動は行為から成り立ち、行為は操作から成り立っている。それに対して行為理論は行為概念を利用する。その場合、活動・行為・操作の三つの分析水準は同時に含まれている。意識によってコントロールされた行為は、Рубинштейнの意味で人間の活動の基本単位であるとともに心理学的分析の実際的基礎となっている。各々の行為は同時に社会的諸関係のあるシステムに必然的に含まれ、それによって動機づけられる。行為は一面では目的に、他面ではそれが実現される諸条件によって制御される。そして内的行為と外的行為は構造的には同一である。従って、行為理論にあって三つの分析水準は同時に考察されるという訳である。

第二の点は、〈方法〉である。批判心理学は、主に、歴史的分析を手段としているが、行為理論は、経験的アプローチを行っているとする。

第三の点は、〈ブルジョワ心理学〉との関係である。批判心理学は、文字通り、ブルジョワ心理学の批判である。それに対して行為理論は、ブルジョワ心理学の進歩的な傾向を自己のうちに取り込むことによって発展した。例えば、Lewin、Chomsky、Miller、Galnter and Pribram、Neisserらの研究を挙げている。

第四の点は、〈実践の定義と重点〉である。批判心理学のいう実践は、一般的-社会的実践であり、具体的な職業実践ではないということである。その上、批判心理学においては理論と実践との関係に一方方向的な決定関係がある。つまり、理論が実践を規定している。それに対して行為理論は、常に特殊な心理学的な職業実践、労働心理学の領域や教育学的職業実践とか臨床的職業実践のような他の領域にも拘わりあっている。それ故、行為理論にあって理論は職業実践との関係で発展される。

第五の点は、〈研究の目的設定〉である。両者の決定的違いは、ブルジョワ階級社会という諸条件のもとでのそれらの研究目的の設定の違いにある。批判心理学は個人の人格の特殊性とブルジョワ生産関係のもとでのその発展の制約の史的分析和包括的な理解を得ようとする。それに対して、行為理論は行為の調整的構造の分析と労働過程における人格発達を妨げるような社会的諸条件の変化の前提としての自己の労働活動の構造の意識化という意味での主体的諸条件の変化の分析のために努力しているということである。

Stadlerによって明確にされた批判心理学と行為理論の五つの差異に対して、批判心理学の立場から、Frigga FaugとRolf Nemitz⁽¹⁴⁾は反論を試みている。Faugは、まず始めに、批判心理学は心理科学の改革であり、パラダイムチェンジ Paradigmenwechselを企てたのだとし、上記の五点で反論している。

第一の点については、行為理論が「下から」、批判心理学が「上から」から分析するということに対して、「上から」とはどういう意味かと問い、次のように批判する。マルクス主義科学として、批判心理学はその対象を全面的に把握することが重要である。従って批判心理学は、「下から」、小さな要素、いわゆる〈行為〉を取り入れ、そこから理論を加算的に構築することは出来ない。なぜならその場合対象の自己運動をとらえそこなう確率は、ほぼ99.9%になるからであると。

第二に、歴史的と経験的との対置についてはどうか、これは奇妙な対照であると彼はいう。批判心理学は、歴史的-経験的に行う、つまり歴史的アプローチは、歴史を明らかにする場合、経験、実際の運動を認識に取り入れることを排除しない。または歴史的アプローチは、実際の運動を明らかにする過程に存在しているからである。

第三の点、批判心理学は、ブルジョワ心理学と批判的関係にあり、それを受容しないという指摘につ

いてであるが、彼は、批判心理学も、ブルジョワ心理学そしてそれらの進歩的な傾向を扱うと反論する。

第四の点については、批判心理学は主体としての人間に拘わり、どのようにこの主体が自分自身と条件を変えることができるのかということをはっきりとしようとしている。また批判心理学は、まず第一に主体としての人間を把握することをめざす、従って理論は人間の自己活動に基づくのだと反論している。

第五の点は、研究の目的設定の違いということであったが、反論では理論と実践との関係にすり替えられている。つまり批判心理学においても、理論がその対象の真に理論的直観を仕上げるということの意味している限り、実践が理論を規定すると述べるに止まっている。

さらに F.Haug らは、次の年に、単なる反論から行為構造理論の全面的批判を展開した。彼らの批判は、基本カテゴリー・構造モデル・実践からの三点にわたって行われた。特に、この中で行為構造理論を、第一に、生産力に中立 produktivkraftneutral であり、第二に、対象に中立 objektneutral であり、第三に、社会に中立 gesellschaftsneutral であり、第四に、主体に中立 subjektneutral であり、そして第五に、制御の情動・動機づけ側面の考慮に関する重大な欠陥があると批判した。この批判に対して、Stadler らは、基本的諸カテゴリー、つまり労働・活動・行為の問題、サイバネティック的モデルに含まれた人間像の問題、行為理論的实践の批判という三つの観点から反論を試みた。彼らが、的確な反論をしているようには感じられないが、ただ次のように述べている。生産力中立性、社会中立性そして主体中立性という非難は、行為制御の認知的側面の分析が、活動の社会的に決定される動機的・情動的側面から少しも離されないで研究されうらば、意味がなくなるに違いないと。さらに批判心理学に対して次のように非難する。心理学は社会を変える科学たりうるか？批判心理学の立場は、これに同意するであろう。しかし「確かに心理学は唯物論的社会理論の発展に寄与しうるけれども、それにとって代えることはできない」と。

以上のような行為構造理論（Stadler、Hacker、Volpert ら）と批判心理学（Haug、Nemitz ら）との間で繰り広げられた激しい論争は、後味の悪い印象を与えたようであるが、その一方で活動研究の本質をついた論争のように思われる。

この批判心理学と行為理論との論争から、心理学研究にとって、どういう意味をもっているのだろうか？

まず第一に、行為を分析単位とする行為理論と活動を分析単位とする活動理論との違いは、行為レベルでの分析は、目的に基づく分析に止まり、その行為を引き起こしている動機は見えてこない。それに対して、活動レベルでの分析では、活動そのものが行為と行為の諸連関であり、諸行為の先にある目標を射程におくことができ、動機の分析が可能となる。言うならば、その人の活動の意図を読み取ることができるということである。活動理論の第一の意義は、そこにあると考えられる。

第二に、行為のレベルでは、F.Haug によって指摘された5点のそれぞれについて克服できない。それは、行為というのは、目的の実現にのみ向けられているからである。行為に基づく分析は、実証研究としては、好まれるけれども、行為は行為でしかなく、行為の連関の背後にある動機まで至ることはできず、最終的には、主体のレベルでの分析は不可能である。逆に言えば、行為と行為の連関を成立させる動機の分析、つまり活動の分析こそが必要とされる。

さて、第三に、行為研究と対比して活動研究の重要性を述べてきたが、批判心理学における活動研究とは何か？旧ソビエト心理学のレオンチエフにとっては、活動研究とは何よりも対象的活動論であり、

また Y.Engeström にとっては、文化・歴史的活動論 (CHAT) である。それに対して、批判心理学グループは、すでに述べたように、Lebenstätigkeit⁽¹⁵⁾、Handlungsfähigkeit⁽¹⁶⁾、Alltäglichen Lebensführung⁽¹⁷⁾ の三つの概念を創出させている。Lebenstätigkeit とは、初期の概念で「具体的個人とその社会的諸条件の間にある媒介するカテゴリー」と理解され、伝統的心理学の排除した「歴史的に生成した人間-世界-連関」を取り込むことを可能とした。従って、心理学の課題は、「具体的経験的個人の生活活動と発達の探求」であるとしている。Handlungsfähigkeit も同じく、媒介概念であるが、「個人と社会的再生産とを媒介する概念」であり、「個人と社会との関係が、対立でなく、矛盾した統一と理解される中心的な分析カテゴリー」であるとしている。さらに Alltäglichen Lebensführung は、「様々な活動を関連ある全体へと組み合わせる目的をもった人間の営み」、「主体が、自分の生活を構造化する具体的な形態」であると述べている。また「個人と社会の抽象的な対立を克服しようとする概念」(Ute H.-Osterkamp)⁽¹⁸⁾ だと述べている。

批判心理学が、対象的活動をという概念を使用せず、常に生活、日常の生活遂行という言葉を中心概念としようとする意図は、人間のトータルな実践をその生活世界との関連の中で掴みたいとすることでなかったのかと考える。言うならば、ヴィゴツキーが言う「意味の背後に生活がある」という事を探求しようとする批判心理学的なアプローチではないだろうか。

最後に、ドイツ批判心理学へ如何に関心をもったのか、如何に研究に生かすのかについて触れておきたい。

ドイツ批判心理学へ注目するきっかけの一つは、言うまでもなく、Klaus Holzkamp (1973)⁽¹⁹⁾ の『感性的認識-知覚の歴史的源泉と社会的機能』への A.H.Леонтьев и А.А. Леонтьев の書評(1975)⁽²⁰⁾「感性的認識のある心理学的構想について」によって、ホルツカンプへの関心が引き起こされた。また批判心理学グループの関心が、ソビエト心理学のレオンチェフの理論へ向けられ、頻りに学習会が開催され、理論的方法論的な検討が行われていたということである⁽²¹⁾。さらに、アメリカのレイヴ(1991)⁽²²⁾ の『状況に埋め込まれた学習』の序文でのドイツ批判心理学への言及であろうか。彼女のパロアルト研究所では、日常的に実践や活動という言葉が飛びかっていたということである。それは、以前から、私たちが心理学の分析単位として活動の概念の重要性を主張していたが、行動主義の蔓延るアメリカにあって活動、実践の概念が、堂々と研究の方法論的基礎として俎上に上がっていたという事は、その時の感動を忘れることはできない。

さて、もう一度最初の議論に戻ると、ドイツ批判心理学の行為理論と活動理論的アプローチを巡る議論は、当時、徐々に国際学会で意識されだした心理学における方法論的な議論と軌を一にしている。

活動理論と行為理論が議論された第二回国際批判心理学会が開催された丁度同じ時期にアメリカで J.V.Wertsh (1979)⁽²³⁾ によって一冊の本が出版されている。The concept of activity in soviet psychology である。同じ年に、「行為の組織」という会議が開催されている。その報告集は、1982年に Mario von Cranach & Rom Harré (Eds.)『行為の分析』⁽²⁴⁾ として出版されたし、また国際的には第22回国際心理学会 (Leibzig, 1980) が開催され、その一つのシンポジウムで「行為の認知的・動機づけ的アスペクト」(W.Hacker, W.Volpert & M.von Cranach (Eds) “Cognitive and Motivational Aspects of Action” (1982年出版)⁽²⁵⁾ が取り上げられていた。

まさに 80 年前後は、行為理論への関心が非常に高まったと言っても過言ではない。この国際的な動向は、概ね、行動理論と行為理論の観点の折衷、両者の対話が目指されていたと理解することができる。

日本では、90 年代に入り、新しい活動理論と文化心理学が台頭してきた。どちらもロシアの心理学の影響、特にエリ・エス・ヴィゴツキーの理論と方法論の影響を受けているものであった。前者は、フィンランドのユーリョ・エンゲストロームであり、後者は、アメリカのマイケル・コールである。両者とも、相互に影響しあう関係にあるが、具体的研究の傾向として、前者は、労働活動を主に取り上げ、後者は、アーティファクトや記号を媒介概念として文化を論じていた。

私たちの立場は、これらの新たに台頭した活動理論や文化心理学に影響を受けながらも、心理学研究における分析単位、つまりヴィゴツキーが提起した研究対象の全体の質を失わないような最小限の単位として何を措定するべきかと考えたとき、これら両者の観点では不十分であると考えた。エンゲストロームの理論は、個人から協同へ、境界横断など新たな観点を入れることによって新たな可能性を与えたことは否めない。しかしその実際は、労働活動の研究に限られていた。また文化心理学も、記号的文化心理学に限局され、生活を基盤とした実践的側面は、後方に退いてしまった感があった。

この点で、批判心理学は、生活世界と人間との統一を意識し、生活実践を媒介概念として、主体性の問題へと向かっていた。これこそが、心理科学の目指すべき道ではないかと我々は考える。

参考文献

- (1) С.Л.Рубинштейн,1934 Проблемы психологии в трудах Карла Маркса,В кн,Проблемы общей психологии.тзда.изд.Педагогика,Москва.
- (2) А.Н.Леонтьев.1938-42, Методологические тетради.В кн.Философия психологии.изд.Моск. уни. 1994
- (3) А.Н.Леонтьев,1940.Основные процессы психической жизни,Вестн.Моск.ун-та.Сер.14. Психология.1983. № 2,С.18-20
- (4) Klaus Holzkamp,1972,Die Beziehung zwischen gesellschaftlicher Relevanz und wissenschaftlichem Erkenntnisgehalt psychologischer Forschung,In.Kritische Psychologie. Vorbereitende Arbeiten.
- (5) Morus Markard,2000,Kritische Psychologie:Methodik vom Standpunkt des Subjekts,in Forum Qualitative Sozialforschung1(2)
- (6) Morus Markard,2009,Einführung in die Kritische Psychologie.Argument Verlag
- (7) Charles W.Tolman &Wolfgang Maiers,1991,Critical Psychology,Contributions to an Historical Science of the Subject.Cambridge University Press.
- (8) Theory & Psychology.2009.Vol.19(2):
- (9) Martin Hildebrand-Nilshon & Georg Rückriem(eds), Kongreßbericht des 1.Internationalen Kongersses zur Tätigkeitstheorie.1986
- (10) Ulrich Garling,1986,>Praxis<und>gegenständliche Tätigkeit< - Zur Problematik der wechselseitigen theoretischen Fundierung der Sozialwissenschaften(Kurzfassung).in. Kongreßbericht des 1.Internationalen Kongersses zur Tätigkeitstheorie.1986
- (11) Michael Stadler,Übersicht.Kritisch-psychologische Grundlagen der Handlungstheorie.in.

Kongreßbericht des 1.Internationalen Kongresses zur Tätigkeitstheorie.1986

- (12) 『第二回国際批判心理学会』(1979)の報告から、「行為構造の討論」発表部門から「活動理論、批判心理学そして行為理論－概観」(Michael Stadler)、「労働活動の心理学的分析、評価と形成の若干の方法論上のアスペクト」(Winfried Hacker)、「学習行為過程のメルクマール」(Martin Hildebrand-Nilshon)
- (13) Holger Brands,1980,Zur >Oberflächen-< und >Binnenstruktur< der Kontroverse zwischen Kritischer Psychologie und Handlungsstrukturtheorie.Forum Kritische Psychologie,6.s.7 - 18
- (14) Frigga Haug, Rolf Nemitz, Thomas Waldhubel, 1980, Kritik der Handlungsstrukturtheorie. Forum Kritische Psychologie, 6.s.18 – 86
- (15) Holzkamp,1977, Die kategorial und theoretische Erfassung der Vermittlung zwischen konkreten Individuen und ihren gesellschaftlichen Lebensbedingungen durch die Kritische Psychologie
- (16) Ute Osterkamp,1978,Erkenntnis,Emotionalität,Handlungsfähigkeit. Forum Kritische Psychologie.3
- (17) Klaus Holzkamp,1996,Manuskripte zum Arbeitsprojekt “Lebensführung”, Forum Kritische Psychologie.36
- (18) Ute Osterkamp 2001, Lebensführung als Problematik von Subjektwissenschaft. Forum Kritische Psychologie.43
- (19) Klaus Holzkamp.1973. Sinnliche Erkenntnis - Historischer Ursprung und gesellschaftliche Funktion der Wahrnehmung
- (20) А.Н.Леонтьев и А.А. Леонтьев.1975.Об одной психологической концепции чувственного познания,Вопросы психологии, № 4
- (21) 1, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1984, (Rückriem,G.et alBerlin)
2, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1985, (Angelika von Hebel, Bremen)
3, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1986, (Manfred Holodynski et al, Bielefeld)
4, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1987, (George Auerheimer, Marburg)
5, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1989. (Hildebrand-Nilshon et al, Bremen)
6, Arbeitstagung über die Psychologie A.N.Leontjew, 1990, (Ernst Berger,et al,Wien)
- (22) Jean Lave and Etienne Wenger, 1991. Situated Learning, Legitimate Peripheral Participation, Cambridge University Press.
- (23) J.V.Wertsh, 1979, The concept of activity in soviet psychology, Sharpe
- (24) Mario von Cranach & Rom Harré (Eds.) 1982, “The Analysis of Action”
- (25) W.Hacker,W.Volpert & M.von Cranach (Eds) 1982, “Cognitive and Motivational Aspects of Action”